

倭訓栞中編

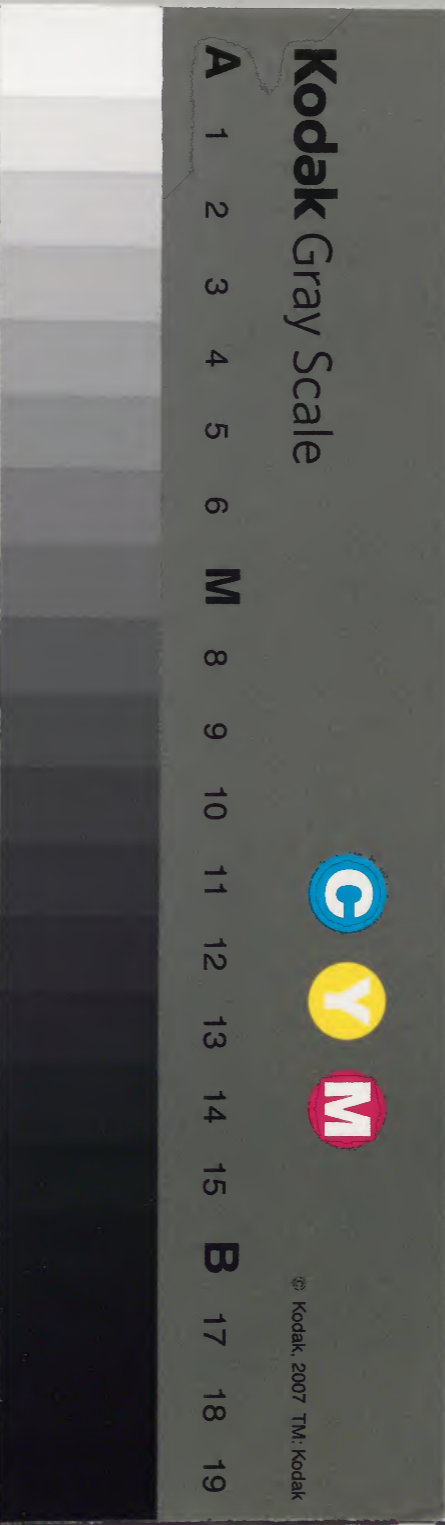
牟部女毛

二十六

			二	和
		八	一	書
	八	〇	六	門
八	一	函	五	
二	冊	架	一	類
			號	

庫文閣内				
三		二		和
六		一		書
二		八		
函		五		
	四	一		
	架	冊	號	類

内閣文庫		
番號	和	21651
冊數	82 (60)	
函號	263	10



教文
庫

文庫

倭訓栞中編 卷之二十六

年の部

倭訓栞中編 卷之二十六

洞津 谷川士清纂

むつふ

又訝

輅

意あり

むつふ

むつふ

むつふ

むつふ

むつふ

むつふ

むつふ

迎字通

儀禮

輅

意あり

雲

萬葉集

古事記

神代紀

一

如

如

倭訓栞中編卷之二十六

むらびく 煩呬の意逆ひ衝の義あり

むらひれみ 古事記舊事記向日神又白印木とも

向日神く作ら誤あり山城國し訓郡向日神社也神祇拾遺向日社北有灰方村大歳神鎮坐式向日神社と

えんえみり今むらび乃明神と日向町とまきとまき

むらつのとくと 紫雲のたふ引くと亡者仏のむらと

むらみえり

むらうのさと 莊子し出たり郭注し无何有謂寛曠无

人之處不问何物悉皆无有故曰无何有之郷萬葉集

よ

心孤く无何有の郷しまきとて蘇姑射の山ハえまき近え

むらひつとて 礫浜おあみ兒戲あり抄六帖し

うあみ子のおたを髪とあうてむらひにその袖まきり

△むきれ 上臈の名向日名方名ありとる女房官品し

えんえみり

むききみり 万葉集し天漢相向立又何向立ともえんえみり

記し對立とえんえみり

むきざぬ 埃囊抄小兒翫物の内し无木簀しえんえみり十

訓抄しりりべのうら物とる

むぎのほた 野客叢書し物藝謂之秋取秋歛之義故

謂四月為麦秋とるりり○おむぎの秋風ふともよ

り

むぎすくみ 和名抄し荒籬は訓せり麦麴はすくみ器

あり下李集しハ味噌漉とる

むぎのえんえみり 飾抄し平治年中秘記引て小忌衣山

藍摺之无山藍時用麦日波志木とるりり今俗くらん

りとる黒穗の義麦奴是あり和名抄しむぎくろと

とるりり黒実の義とや

△むくみ

浮腫はむくみ 蠱身の義也

むくみ

蒙古のよきあり 韃靼は蒙古部あり 契丹又

大遼も同し

むぐら

俗語あり 無究の音ありと云

むぐら

葎生也 蓬生の名也 ○葎原は越中あり 菟光

う卒軍は葎のひもろ野あり

むくし

神宮にて潔齊の用とする 海藻あり 形ひくし

色くすき一日くあつて白くて紙とけくたらしむるなり

無垢潮の美しや或はくし草にありと云むくはむの精也

之志摩のふしはあひと云根赤くて味甘しと云

むくし

元正紀にきくむくしと云

むくし

日本紀和名抄に蠱はむくし 字各に動擾自

と云しあり

むくしのやど

葎の宿あり 荒しむるなり ○むくし

の門と云るを同し

むくし

蒙古高句麗の精訛せる後宇多院弘安

四年に元兵我博多より大風を遣て十萬の軍皆没溺

せし時の称あり元はくし蒙古の種は高麗より加勢せ

はめてつひ呼つるあり 蒙古を即韃靼也と云

△むげち

東國の俗むげちと云はつし 涅槃經に仏

性名曰无礙智と云ふなり 又大坂播州にいげちふし 東玉

しきせりふしと云

△むこどり

雌は犬と云むこどり 驚て雄のたつと鷹と云は云

と云 鴛鳥の義あり ○鴛取の次才は江次第と云ふあり

よみ入のりあり 類聚雜要に鴛娶と云

△むじん

源氏に云唯識論に云何无慙不顧自法輕拒

賢善為性云と云ふ 又讀書鏡に无慙人と云ふあり ○

むんふしと云 俗語も慚ふきあり

むさう

無相とちり相撲の手大石が轉つたり〇夢想とちり東鑑に先是去三月廿二日可味有二品改子多々想面二丈計の鏡浮曲比浦波其中有聲云吾是太神宮也天下監とる世大に溢ましく兵可徴一泰時吾太平榮らん者として仍凝信心せとる即日使波多野次良朝定為伊勢太神宮使節云々

むさう

無造作也

△むーや

虫屋の義續千載集に虫籠に因

むーつ

寛弘元實とちり鎌倉の式目に入

むーん

源氏に十訓抄に賤弘行に直ひあ

いづるもの之き物弘も力弘入トと無心とちり要事弘のつひけとる

むどん

口論に無尽の音之〇世に無尽講ふと云

と僧祇律に無尽財より出ると結末へ

むーろひ

新撰享鏡に樹弘より庭檜の義とや詳ふ

らす

むーあひ

虫襖とちり袍の色とちり

むーのす

津輕邊より出す虫の巢より青珠あり人は

弘珍とちり巾着の壓子とす是は自然に成るものす造製のものとして朝鮮の瓔珠あり

むーむむ

拾遺集に虫食の義あり蟹弘より

むーもの

和名抄に濃弘より蒸也と注やり大和物語

に菜弘むーものとして物ありて〇むーは餛飩の

むぞおん

牙盾の音あり或年楯に作まると韓非子

に出て自言の相送する事弘より後世通俗文に互中の

むぞす

無上の義あり互上の義あり

むしめえむ 倭名抄に齧むとあり今むしとひとてあり

蝕牙も回し

むしえりみ 年中行事致合の位に撰虫とよまゆら

式ありるすはあけまとも殿上の道遙として殿上人とよらる野

ふとくむしひて虫籠く虫は撰入くるまるとありとえり

堀川帝の時より始る著聞集に天寶遺事毎至秋

時宮中妃妻輩皆捉蟋蟀閉養小金籠中置枕函畔聞其

聲庶民家皆効之とえり

む志やどろろ 後醍醐帝の時朝廷置武者所以新田氏族為

頭人とも 無手ともむずく引くむとひむぢくして居ふ

△むす とも是あり

むまびまの 結松也着葉集に多くあり岩代の結ひ松と

よハ紀の岩代とて岩代の嘉名ともやく契は結ひ意あり岩

代の岡乃草根とて結ひくふとよあり有間皇子より起れ

るハハけり久伊勢の序家の前裁の結松の残まらばて

能因法師の車はありする袋草紙にるるあり

むすがふ 新撰字鏡に結糸むまびまとよあり所

結の義あり越前かよとたえぬありひむまびまけり

結り

むまひとうだい 結燈臺あり竹は三本結ひくその上り

燈臺とよあり

むまひづくゑ 結案の義源氏とてえりあり柳盤の類

朱つー〇江次第に結黒木為札注し以檜木葉付札等

脚徧葉敷面とつるハ横に撓えて案面り敷とつり

むすくづば 正しはとすこひや譯し没厨箇未突とけり

又莫斯科米亜とてえり本名うすんらゆふあんともつり

歐羅巴の内阿蘭陀の東にありる蛮國の名あり草と



いそり

△むたく 日本紀一 身抱はよりむざうくともえくあり

△むらき 鞭差の高名しりまき平治元年義朝戦破を

く東國一 走る三條河原一いのかく新羅義光の三男平賀冠者盛義の子義信唯一騎返一合て強敵を拒くはしり信州佐久郡平賀の人也

むらけ 寶基本紀一 由鞭掛とちり宮殿棟の下破風の

中より貫き出する木也伊勢兩宮一限わり式一は鞭懸木と

△むつき むつきも同く艶詞り

あゝあゝのさく君や思ふらんゆきまてむつれしそ

むつえ 讃岐一六妻山あり崇徳院御製

ゆきさくくひとりあすぬもゆきゆきのむつえの鹿はつそあらん

むつが 日本紀一 憤とより物語一えくあり此意あり

今と小児しゆくしゆ語あり

むつの 和琴の和名抄一 体似箏而短小有六絃と見え

あり新勅撰集一

六の緒のよりゆしそむつはひくはとあまの神やめれぬ

むつり 新勅撰集一 由より六道輪廻云々一

むつちよび 和名抄一 駢拇証訓ヤリ今俗六申ひとそり

むつのみあり 析年祭祝詞一 六御縣とちり今大和の六

郡あり此御縣ハ今一宮田とよよて幾内一 天皇の供御の物作御座とよよと是あり六あり式一は御縣坐神社とのみ奉あり

むつれが 類聚雜要一 六花前とよ由 粧粉盤番黒女

むつのみち 八花前とよ如一 釈教一は六道あり

△むとぐ

氏姓ノ身人部とあり又六人部とあり朝明郡
鶴村ノ齊宮の奮跡ありて六人部出るといふ○神鳳抄ノ
尾張國三人部出るといふ○神鳳抄ノ尾張國三人部御
菌スルあり

△むふぬ

空居の義来一六百番分合

浪のえくたす小舟のむふぬとて月よりその味々多き

むふぎ

和名抄ノ鱧魚ハより万葉集と同一口在頤下

者也とて胸臆の義来一とあり常ノハふぎとあり
新撰字鏡ノ鱧又鱧又魖ハより尔雅郭注毛詩陸
疏東壁本草ふとて据まて鱧ハ大魚也といふノ鱧鱧ハ
ふ一紀伊日向ノ長六尺餘まより一尺余あるとあり
とあり○日本紀ノ棟波より或ハ檣波より岑木ノ義
あり一○棟覆木ハ康富記ノ外宮のよりふより○東門
ノ棟木波上り波より○庭訓ノ棟榎組よりあり棟の上り

逆一又ノ榎波覆木とあり○大佛殿の棟も富士山より出
凡五國の役夫波登すとあり○應仁紀ノ棟別とあり又
申國初令條とあり

むふりけ

萬葉集ノはとりのむふりけるゆらんといふ

草木波胸とて分行あり

むふりぞ

棟札の義多く寺社ノあり○伊勢朝明郡殖

栗神社式ノ申姓氏録ノ殖栗連大中臣同祖とあり千
栗村ノあり天平三年のむふ札あり

むふみろ

古事記ノかきろ鳥むふみろ時とて水上の鳥ハ

胸波より出たる波より

むふがね

和名抄ノ鳩尾骨波より今もさる鳩尾波音

とて称ス

むふらく

出雲風土記ノ童女胸鈕所とてええあり胸の

透たるも容白れよき波あり

むふぶつ 俗にむふぶつともなると胸樓の義祓や反ふ
へむふつとともなると

むふぶつ 式外吉野郡坪内村の宗像神祠ハ大社也城内
来迎院あり一名御所坊とハ護良親王嘗て寓居たると
野ふるをてあり○式域上郡宗像神社三座類聚格と登
美山ノ坐とつは是あり今外山村ノあり春日と糸才○尾
張國中嶋郡宗形神社下野國寒川郡胸形神社伯耆
國會是郡甯形神社備前國赤坂郡鴨神社宗形神
社津高郡鴨神社宗形神社凡て筑前國宗像郡宗像
大神同神也

むふぶつ 拾遺集枕草紙ふとくとむ空車の義人の
ぬふりよへ
むふぶつ 松悖ハ胸騷の義
むふぶつ 文集ノ三秋而宮漏正長空階雨滴万里而

郷園何有落葉窓深とと申定家

独きくをささ橋ノ雨落て我う道孤う流むこゆり
むふぶつ 空谷ハよへ

むふぶつ 虚舟あり莊子ノ申後三条院御製
住吉の神ハおんむふぶつき舟ハてきたれ

本朝文粹法皇停封戸書ノ莫繫小僧虚舟之心ととえ
拾芥抄太上天皇の下ノ虚舟とあり伊勢ノ法皇ノなり
一ふり水のうへうう舟の君ありハとよめる此意と
つら荀子ノ君ハ舟也ともんあり

むふぶつ 空床の義
むふぶつ 空鼓ありあきめつとつら同古今六帖
むふぶつ 身の空しく消く無常の煙のたつたふ
あり

△む祢あて 胸當の義青瑣高議より訶子是なる一

む祢くひ 永正記一胸株とる箱公埋むの時棺の上

む祢くひ 木河まろく土埋むことより 禮記の擗膺公より哭泣とつけり萬葉集に

む祢くひ 心月河より 胸霧の義あり

む祢のけき 源氏より胸刊の義驚くるよりつらき

む祢のきり 源氏より申遊仙窟一心焦孤より

む祢つらき 心ハ未敷蓮花の如くつらき 胸の思いと火よりせとるよりよてむ

のけきとるより 源氏より申遊仙窟一心焦孤より

む祢のたまき 胸の思いと火よりせとるよりよてむ

む祢のおもひ 胸の思いと火よりせとるよりよてむ

るこがくあくとるより又む祢のひともむ祢のけきとるより

きり

む祢あはれがき 胸の塞るはより

む祢あひがとれ 袂布あはれ背を切り着て前ハ号るあひ

△むたた戸 めたたまの精せら茶へ

△むべつが 梅壺へ凝花舎はよ和名抄よりある○日本

△むぐん 太平記一後醍醐天皇御謀叛よりち河名を

実より兼應二年癸巳也とつら二字とるより呉音あり

△むまが 馬場あり今がとつら北史一以千里為牧地今

之馬場とるよりあり

△むまやぢ 駅路の義ありむ戸はぎともよ○延喜式一驛

子あり馬子のゆ

む戸が存 槽はより馬松の義あり○古事記に馬楯ともみ

むまぎぬ 和名抄に馬衣はより

むませみ 和名抄に馬蜩はよりむ戸は大有り

むまひぢり 善露の一名ありや職人か合し

むまればき 生得の義之源氏より由稟性より

むまいつだ 馬はとて花の如くまゝあり軍中あり

つ 天正の比まてはさだちやうと稱し名ぬ

ふ武士馬は弛てその終りてはさざらやうと大坂

つけえ物とてく嚏とくやうまゝ馬とめく駈とせは是と年

始の祝義と守

周禮注疏に攻馬と云くあり
馬上して睡はし詩に馬に續殘夢を

むまはせむ 槽檻也と云く卑妙集に云くあり

むまぢり 驛長の義之類聚國史に駅戸と云く○むま

むまぢり 和名抄に馬長之

むまぢり 梅花貝之新後拾遺に

むまぢり 美風不波やぶらん陸奥の籬の梅のとれづい

むまぢり 梅の花毛とて鷹の目のおとけら毛なりと

むまぢり 埋井の義に

むまぢり ちやひすつりのやつふのたはとてはまの友舟申きもわれり

むまぢり 出羽國の宴ありとちやくの関ともつらとちやく

むまぢり

むまぢり

むまぢり

むまぢり

つゝむらきたの意あつて一苗代もむらり種とよみり

倭訓栞中編卷之二十六

倭訓栞中編卷之二十六

米の部

洞津 谷川士清纂

△えあろび 了俊の嚴島詣日記目遊と云云紋波津て
とろえもり

△えいど 冥途とくけり閑際筆記有馬山清凉院の石
文死して十九日と甦る人あり冥途のうら問ふ石文曰只湖山
の間と在る風景の好く對するのうら問ふ我昔江洲の湖
水波えて大い心目波悦つむらうの後心く志す時くまら對
ん事波欲す是あつてとら由參あ吉田の後人長四郎痴
病く不食事十余日とて死し垂つて只鼻息あつたり
亦五六日過て大根の絞汁とて咽開き八九日波経て復故し
ぬ无性の時のうら問つて平生棒と肩くけ郷中波歩り
事のとて夢中のめりとて



侍中群要仁王會一仰所令春合名香くも由
 名取くけり國くも多一契仲云倭訶之有名取
 枕寝之有枕因枕而夢熟因名取佳句成歌之称益為此乎
 とつり勝地多る一又名跡も又由
 吳越春秋一中心迷惑韓愈集一下閑迷惑之胸
 と又えより○上野くもげんがくも
 明細とちり明白細密はり
 源氏くも由面目の轉語之面目ハ史記一出より
 明州あり古今集一安倍仲麻呂帰るんとて
 馬のくもむけ一たる取くも多り明くも寧波府くも唐
 山第一のよき港あり浙江省の内くも春秋の時國ありと
 つり寧波の南京音みんがくも也
 名匠とちり○十日の勤學より一日の名匠と
 三ハ桓譚新論一三歳學不知三歳擇師矣くも多り

△先くも 北牛也異記一悖とより伊豫くも多り
 ○女牛小腹つれくもたぐひとより袋草紙くも由
 上野國あり妙義権現と称くも叡山の法性房の靈
 也とより又飯綱也とより法性房尊意を延喜帝の時の人
 あり此山奇異の形一あり天山とより此山専ら天狗を崇む
 廟拜也秋奠くも由
 △先瓜りり 日本紀萬葉集の哥小多一欲目の義入すくも由
 ときあり今も御目小くもとより
 新様樂記一以謀抜人目と入くも由
 側目とより源氏くも又名えり
 偷針眼とよ由治法一肩背くも於て針を細砂とより
 出して瘡ははすくもとよりかたり也
 目金の違ハめくりを度とさ一かのもよりとより
 あり○眼鏡とよりとより義同一古哥に



光ハ丸ク後アリといふて之を目と云ふ
方輿勝覽ト滿刺加國出鑿鏡トソハハ西域より始ル
物アリト云フ硝子を用フ日本ハ水晶と用カ来キ水晶ハ
本の産ト天下第一ト云フ本草ト云フ○遠キハ
千里鏡アリ人相ウケハ天眼鏡アリ數リハ火ト目
ノヨリ虫リハ七奇圖説ト頭微鏡ト云フハ蜘蛛
足二三歳ノ小兒ノ臂リト云フ人髮拇指ノ如キ大サト云フ竹
ノ節ノ大ト細ト節リト少年ノ髮ハ節遠ク老キノ者ハ
節ツキト云フ

光カト 子及ク之リハ同一時リ子ハ今リ子ノ數
光トド 賦ト云フ目所記ト注ト云フ

光カト 和布蒸菁根ノ義アリ根ト云フ○神頭ノ
矢ハ此リト云フ造カト本式ト云フ直リト云フ
ト云フ

光ツヤク 新撰字鏡ト助ハ云フ日本紀ト眼炎ハ

光ツヤク トツヤクト云フ 異記ト晴ハ云フ又云ト云フ新

撰字鏡ト瞭ハ云フ 盲人ハ目闇キ義アリ武備志ト瞎子ハト云

光ト云フ 又瞽ト云フ徒然草ト云フ法師ノハト云フ

光ト云フ 江戸ト云フ日本武尊ノ昔傳アリ

光ト云フ 弘法ノ時ト云フ内陣ト納テ不動ハ安置ト云フ伊

勢鈴鹿郡野登山及都賀村ノ觀音ト同日ノ誕アリ

光ト云フ 日本紀ト曲水ト云フ上巳ト曲水ノ宴

光ト云フ 新古今集ト云フ童ト侍ト云

人ノ年比ト云フ初メハ云フ七月十日比月ト云フ

光ト云フ 歸ト云フト云フ辭書ト云フ離カト云フ

れんたうみり人なをけりぬるい定先の間より

これの名残はしりと全く月くくく

忘るくけりハを井くくぬも空の自然先くくあすそ

此ふよまきま朱へ一まきかれの初葉集も死去の事り

多くくく此時くくはりくく

えくく此点 明律考く椀猪は訓す盲杖の義舟の子

持のせり木あり

△えさまくく 目覚く種の義草の名ふあり守○後人茶

の和名とせり○須磨浦く行平

らふたぐく波のまは須磨の甲にえりまくまの山ゆりか

△えくく 庭訓往來く召符く又由訴状は与くく相の

方召の状く

えくく 召名あり朝野群載直物涂目勘文くく

えくく 狭衣くくづりくく

えくく

免トウ 鈴子也トウ目鹿の義本草く箱鼻肉肺と

々鹿頭又鹿肉く名くトウ京めくハ目黒トウ

尺以下の小あり称あり江戸くくくトウ相撲くく

トウ

免トウ 召使トウ其役字のめく禁廷の官人

免トウ 相撲節トウ貞信公記く

トウ初り召合トウ後トウすぐくえんするは拔出ト

ハトウ○今屋造立具のるく此詞あり

免トウ 日本紀く宮人ハトウ召仕の妻あり

△免トウ 山東の人蛙は捕く熱湯く投く皮は剥

て林醋く和く食く是は眼摩贈トウ本朝食鑑く記

せり宋書く蝦蟆膾く

△免トウ 蘭笠穉笠ありトウ目狭の義ありせき

あみり教書也トウ

△免だー 佛足跡の款に免だりつるをいふと云ふつとつる

△免だり 平家物語に免だりがかとつる今も免だりいふ

△免だり 源氏に由演繁露に止於馬道は馬道許人

△免だり 上馬也といひ和名抄に向堂之道也といふ今も免だり

△免だり 縁のふとを十訓抄に免だりたつともい

△免だり 延喜式に減金といふより明の昏に磨薄に銷金

△免だり 金よりきけ鍍金きんりつきハ鍍銀ありといふ

△免だり 鍍ハ字彙に以金飾物也といふなりちへ重仙りの太刀に皆

△免だり 免だりといふ○免だりききやつきの俗語ハ牛頭阿旁と

△免だり 善業集に目豆兒といふ身女兒といふなり

△免だり 八真の通音あり

△免だり 類聚三代格に聖武帝創造国分二寺分号

△免だり 諸國減罪之寺といふあり

△免だり 平山季繁に馬目鶴毛といふ武藏の地名に

△免だり 目白目黒赤いハ其馬目出やといふの地名あり

△免だり 減相の字梵書に由○免だりけいといふ減法

△免だり 界あり

△免だり 減門といふあり大福狼籍減門に三箇の凶日と

△免だり 一切に用いしつとつる減日没日と同

△免だり 新撰字鏡に肝にあり

△免だり 要字訓に妻取の義あり

△免だり 徒然草に由伝に寓目といふ意あり

△免だり 馬頭盤といふけり侍中群要に由又蓋盤あり

あつとんくちり又りんごひともりみれん目厭ひの義あるや○禁中にておめんだうとろへ御馬道とくけり

△先くようー 武備志ー生得好とよあり

△先くくくー 竹取物語先くくくとやけつりくとさ申今もりよ詞之

まさすけくさ申退事へとろ汗^{カサ}移^{サシ}袴あくとい

つ東帯色目にも次第より上り着るるとり守ありとんた

ま

△先くとりー 音の甲しとろ先くハハワふあうしはりみりハハ

かろ之甲はりより上下ともけり又輕とろ重とろともよ

ま

先くちりー 單皮手覆あつれろ紅毛詞あつとろ希ふ惣チ

しあつとろとあつてらやく織あつあつ

先くかみー 宇治拾遺ー鷹の事にろ

先くまろー 俗語あつ果決の意よりきてきたんとい

倭訓栞中編卷之二十六

洞津 谷川士清纂

毛の部

△毛くきー 庭訓ー閑居勝氣とろ申勝くとろて鬱滞す

ま

毛くすー 僧家よりハ帽子の音あり○樂昏より面牟子と

あつとろも同意あつ

毛くちりー 毛利氏ハ大江廣元の子季光の後あり

毛くせんー 毛繩の音あり花毛氈ハ大花毛氈あつとろ絨

毯ともス由○坐氈も遵生ハ牋よりあつ

△毛くぐみー 日本紀ー火燼和名抄ー燼はより燃杓の義

あり

△毛くぐー 伏櫛の音あつとろより出さる俗語あつ

つ毛くぐはねとろとろ馬より出さる

一説ノ藻搔の義藻ハ川或ハ池ノてま手足ノまてひて人

△とまきり

藻切の義舟の具ノノリ後太平記ノ藻きりヤ

とまきり 破の綱ひきり拂ふとるあり

△とくす

目まらあり目よと志くはるる之尤傳の目送の玄

あり天子ノ侍目とよ

△とくら

目論の音あり史記ノノハありろとよむハ蛇心

とくら 目まらあり目よと志くはるる之尤傳の目送の玄

△とく水

書叙指南ノ顧視其人曰目礼とるあり

△とくさん

東鑑ノ目算とるあり今基ノノリ

△とくあり

俗ノとくの木阿弥とよむ盲人の名あり筒井

順昭ハ信長時代の人卒して三年の間隠し置たり木阿弥
ノ音声よく似たりはりノ闇取ノ音も他必敵方の應答セ
しむ三年過く順昭の死ハ披露アリヨリハ本の盲人ノ事

とくとり 意ありとくとり

△とくとり

文字札の義四書五經又ハ熟字鳥魚取の

二字三字ハまゝか貝の如く取る事あり又ハワリノ事あり
よみて取もあり又文字の達人トてとるありと死ちりり
とく取る事あり

△とくす

最末の義あり

△とく

萬葉集ノ以在ハノ事ありちあ及たあり○俗ノ

とく 意通つ 凭字の意あり

△とたせ

今持の義筆のせハ筆架あり頼とせハ靠腦

とつひおとぐいとをハ枕類と俱ノ遵生ハ牋ノる白依
竿のせありとつ上野下野ノ凡ク困のとたせと奥
州ノて菌の品ノ幕の糖の斜りけり

△とたす

齋とあり持ありすの義あり一賣ハ俗字あり



とびきた

△とび

是あり

とちり

持花乃義後撰集より

とちり

志のぶらうはらへん摺の義縦横と多くとび

て摺うる衣志のふれはまの意あり○今俗一種の草紙

ハその花乃綬の如くすまハ尔雅の注に綬蘭と云く

或ハ虹花ともゆぢ花とも水巴戟も是ありと云う筑前

志んことふと

とちり

十五日の満潮と云あり

とちり

古事記に因河海持別てとも因山野持別て

と云えう何と海と山と野と別ち持の謂あり

とちり

坐置之夜川舟も是ハ用

とちり

俗語あり本分ハ訣セ

△とび

纏綿の義と云れの轉セあり

とび

物怪の音ありと云けの条と云う盛衰記

と云ぶ色のゆけ衣と云あり

とび

物躰の字之俗に物体ありと云

とび

東鑑にとびと云

とび

盛相と云けり飯はと云人別つ凡器あり叢林

語あり

とつ

水雲帟とツけり紙屋紙也と云下家ハ神

△と

代より帟と云心得ツ

と

基ハより本居の義あり

と

商家の本錢と云本家の義あり資本とも云

由○望姓ハよびハ本出の義ハ本姓の義ハ用ハハあり

○碧岩集ハ方語商人欲得利而失本忙然曰落節と云

とと祿

玉堂漫筆より原價と云えり

とどき

燕居華記より細齒鋸と云ふり

ととす忽

神樂奇より續紀分垣り所より本末唱和と

又建武年中行事より本末の神楽の所作人と云えり

○うたの本ハ上句ハソハ末ハ下句ハソ

とと志免

伊東涯曰元人官有達魯花赤者盖夷語之草

木子と云く達魯花猶華言荷包上壓口捺子也亦由古言總

轄之比今按此と云と志免と云之今大名家より此号あり

ととつと

本國ハソ日本紀より本属と云り

ととつと

本色あり白きハソ

ととこびく

日本紀より左右ハソ

とと欠び

津國よりあり大和物語より云く

とと求女塚はす人よりつら志む毎よりあり大名寄り求塚と

伊前の濱辺よりありと云く

女墓のりあり

ととみり

昔時より人の義

ととつと

舊来より約の義あり韓子より桓公孤竹孤伐

て妻由き秋内迷ひ道孤失つ管仲より老馬の智用し

とと放ちて追ひぬると云り後撰集より

ととハ道と云ふ祿と云ふ里ハ云く約より後をせと云り

△とのり

古事記より物言と云く神代紀より言語ハソ

古今集よりこのりハソ

とのうき

輟耕録より世称郷音為唇手と云り

との祿

物の音あり云ふたひと云く祿ありすと云

ふハ管絃の類ありとの祿ありすと云

との志免

崇神紀より物実ハソ

とのひた

新撰字鏡より齊ハソ

このさー 度は物とけりてあるあり又長けりけり長さ

八尺あり尺つゝ念ハ長と七尺あり

このたみ 和名抄に曝はあり鳥受食覆也と記せり

このもろむあ 利未亞大洲の内なるこの本國也と云う莫訥

木太波亞と譯す

このたち 裁刀は味名おは剪刀はものたちをなと

すえり今にまきりとすも回

このよう 関西にて癩人ななり

このまね 物真似の義あり僧率庵詩の百鳥鳴人是也と

つり三箇重事抄に五節に序前の召に今やうのまね

あつておかしき事ともあらありと云ふなり

このー 魏氏春秋に宜作物師長神主と云ふなり此物を

鬼物はよるや○西宮記に雅樂寮物師と云ふなるハ樂番と

つゞくなりあり

このおひひ 物事は思ふあり古奇に

思ひとありも物はおひひありたれなりとたふおひひや君

このめひひ 乞食はよ長崎にてせん慈又山むんとしひ上

総てついたうとついついたうハ陪堂也下総にて氣樂とつひ

薩摩日向にて禪門とつひ大坂垣外とつひ

このふー 源氏に由近衛の舎人の中東遊に達しつゝ

祭物節に補す其中に番長府掌ありますなりあり春日

祭賀茂多の羽林東遊の近衛十人召具はつゝ物節近衛

求子駿河舞ありつゝ奉は勅むることなり

このづーら 弓鉄炮の頭は物頭の義物ハ物部の物之

とつり足輕頭ともつひ卒長あり

このづひひ 和名抄に癩狂は訓せり東鑑に物狂女房

とつり今と物とつひとつり此物ハ鬼の義朱

つゝ○このとつりハハハ及ひ同義あり源氏にこのづひ

一しゆめんくわう

このまひー 文選く寂とよゆうとのハ鬼とよみ物すぐーと云

と同意あり

このふりころ 世諺く何事にし何きう形さうあさけく一とち

あらめとら

このふりさぬ 全浙兵制く晒衣竿公譯と

このぞふふ 枕草紙く足物損ひあり

△とびきのすめ 万葉集くくん虫裳引之姿とくけり

△とぶー 藻伏の義万葉集くとがーつふあとよゆうとぶー

ハ右ぶーとつう如く束縛ハ一つはねとの物とよみあり○海魚ハ

とろく頭く瘤あるとのあり二三尺く及とのけりこぶたいともい

ふうひ鯛と称さうとのを類く

△とみらふ 鷹にりふ赤文の事ありとつう

和名抄く糙とよゆう穀米の義今りふ黒米ありとい

とら

とらふらふ 多識論く颺扇と訓せり

とみらのやう 紅葉の山ありとみらけり山とらり

とみらのちり 紅葉のうらう淵とらり

とみらのこげり 紅葉の深けりくさうと幌くみさくさう

とみらのちりろ 紅葉の庭あり苔庭ありとらりちりーきた

とらふらふ

△とんり 幾のんりくしふと文目の義銭文とら出たう今及字

とらふらふ 銭の省文あり○蝦夷く慶長小判一兩く砂金七及二

とんり 分く通用と

とんり 門徒とくけり伴天連門徒御制禁ありと令條く

とんり

とんり 常に文盲とくけり無名抄井蛙抄ありに蚊虻とく

けり性天集く奮蚊虻カ答海岳徳とよ意ありとまきと何

晏々論語集解之文盲者凡言文皆不勝於人と云々たれど文無
の轉訛^マ詞^マあ^マ一^マ

とんぢぢ

朝野群載之問註とけり新訟對決の意とつら○向

注所ハ源頼朝卿の始て置^マよ^マ東鑑^マ北条の時執事の
マ又引付とて置^マ

とんかり

紋縞とてある奥州より織出た文縞似あつ○紋

絹ハ阿蘭より来ふ○考声切韻の紋呉越謂小綾也ともある

とんきこみ

類聚雜要大饗に云く海月と並つるいづれ物

トヤソミ

△とんじん

世に云く稱するそのハ綿花布ありそれを云う

か孫きんと稱するハ西洋布也と云うまた常陸の真岡より

ある孫ソミあり室町殿日記に云はるゝとんじん云々あり一足

付壹及六七分とつら

△とんち

百と云ふちつれ轉千ちのち云々

とんご

釋奠に宴穩座豎義百度坐と云ふ夏園大曆より

又

とんよせ

股寄の義とや保元物語の異本に鎮西八郎の太刀

のゆよせと敵の矢と射と免と云々大諸礼と云々

のゆるハ武家の太刀と云々

とんぢぢ

股裁の義袴と云うまたをけと云うものあり

免と云ふ類聚雜要童女装束着条に股立縫目と云ふ今

とんぢぢと云ふ是之源氏に云ふあけと云ふ是也とい

つら○返と云うたらと云う馬込け取時と云う

とんぢぢ

古事記の哥と云ふ股長の義と云ふ足引伸を

とんぢぢ展轉反側の意

とんぢぢ

百種の義あり又百草ふあり

とんぢぢ

禪福派より行厨集に股衣と云ふあり股に牽た

ふ義あり房州と云ふとびいと常につら又猿股引あり

とやわら

和名抄に百族と云う

とたふ

後三條院の皇子輔仁親王と云ふ又三宮太夫と

と云ふ左府源有仁公ハ其子と云ふと云ふ今鏡に百太夫と有仁公の事と云ふハ非くと云ふ

とこいけ

百小池の夏ハ西京雜記に云う

とくさげり

百轉の義鶯と云う

とよぶさ

新六帖に云ふ百夜草と云ふ一月草と云ふと云ふ又

と云ふ荅と云ふ秋百日の間花咲と云ふ○藏玉集に菊と云ふ

ときつて

鳥のあしと云ふと云ふ

とえのまろ

百枝の松と云ふ水左記に白河院の時倒ると云ふ

と云ふ伊勢内宮ふと云ふ外に詠と云ふ例あり今其處に云ふ人あり

とくときづつ

東鑑に股解香と云ふと云ふ

とりのらづき

桃の盃あり重三の賀と云ふ

△とやー

和名抄に麦牙と云ふと云ふ大豆黄卷と云ふ

とのやー 藥はよのれと云ふと云ふ菫の義やと云ふ

とやー 朱子語類に模様と云ふ俗語あり○衣服の深模様

とやー

ハ西土蛮國と云ふと云ふ

とやー 俗に胸氣不爽と云ふと云ふ霧より出ると云ふ詞と云ふ○

とやー

日本紀に不便又不縁と云ふ

△とやー

日本紀に越後國より燃土燃水を献と云ふ

と云ふ江南通志に膏風ハ土と云ふ繁昌土人堀湾下地得黒土燥之可以炊と云ふ者あり近江の土も近く似たり○と云ふ水と云ふと云ふの下に云ふ

△とやー

吉野の望の窟と云ふと云ふ僧正行尊

まの居は海彦くく思ふんをらぬ窟と世をわらう

△まろひき 俗語く主馬判官盛久とくく平家物語長門本

く主馬入道盛國く末子主馬八郎左エ門盛久とくく

まろや 神祇本源く草菅盛屋二字とくくあり神供を

調ふ所ありく物部守屋事ハ日本紀くく

まろべのりく 守國堂村くく万葉集く橘守部のりく

いの門田とくく

まろべ 万葉集く守部とくけり今のせきりりりたるひを

まろ

△まろく 和名抄く膠はくく監の義あり童蒙頌韻く

まろりく今造釀はく者の醬の類ふと此名とくく酒く

今俗く濁酒とくく

まろハ 膳ハ兩又也と周礼の注くく

まろりか 神樂哥小諸舉とくく哥のりりり

句は畧く茅二句をまろくくたるとくく陽關三疊の曲
のありとくく

まろぶき 諸聲あり小苗或ハ鳴りく

まろむら 土佐日記くく互く耻く

まろまひ 神社くく東遊く駿河舞求子とも森と諸君と

まろ

まろく 諸哥あり本末はくく建武中行事く庭火ハ

まろき とも後哥はくハ人長さ法はくく

まろき 両釣ありく裳の腰とくくきりゆ

とんぬりひすひ茶くく事もくく名香

とくむふとくく

まろひき 絡注草はくく葉の相向くとくく○万葉集く

武藏野の草ハ諸向くくハソくく

まろりく 古事談くく埃囊抄くく折戸とくく

倭訓栞中編卷之二十六終

推衡門也と云う海人藻芥く武士の家は不立棟門皆と云う

あつ戸あつくと云ふ
と云ふと云ふ
神代紀く熊野諸手船と云うと云う諸手ハ水

手の多きあり
と云うと云う
和名抄く青鷹と云う



倭訓栞中編卷之二十六終

